

氏名	オカダエミ 岡田恵美
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第179号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉インド鍵盤楽器考－楽器のグローバル化とローカル文化の再編－
論文等審査委員	
（総合主査）	東京芸術大学 准教授（音楽学部） 植村幸生
（副査）	〃 教授（〃） 塚原康子
（〃）	〃 〃（〃） 片山千佳子
（〃）	京都教育大学 〃 田中多佳子

（論文内容の要旨）

長い歴史と複雑な理論をもつインド古典音楽を、電子キーボードで演奏する古典音楽奏者が、近年出現している。本研究はこの事実が出発点となり、インド国内に浸透するハルモニウムと電子キーボードを主な研究対象として、インドにおける鍵盤楽器の受容を、「楽器のグローバル化」と「楽器の受容による文化の再編」という角度から論及した。論文構成は、第1部「北インドにおけるハルモニウムのローカル化」、第2部「近年の電子キーボードにみるグローバル化の諸相」、第3部「インド鍵盤楽器考」の3部構成である。

第1部の第1章「ハルモニウムの受容と変遷」では、19世紀後半に伝播した仏製ハルモニウムが国内改良され、北インドで受容される過程を考察した。1886年には外付の鞆や鍵盤の小型化等の調整を経て、国内生産が開始し、国内広域に波及して古典音楽や宗教歌謡の伴奏楽器として広く採用された。一方では採用反対の論争も起こり、1939年国営ラジオ放送では使用が禁止され、以後1971年の規制緩和まで続いた。その考察から表面化したことは、反対の論点が、「鍵盤楽器」ゆえに微分音やボルタメントのような装飾音が表現できないという点に向けられている事実であり、それが古典音楽の固有価値、すなわち古典音楽はこうあるべきという「ローカル規範」として機能していることを指摘した。また同時に、伴奏楽器としての地位が脅かされたサーランギー奏者等の対抗的姿勢も、新旧楽器の変化に伴う反発の事象として言及した。そうした不遇時代を経て、2006年に国家勲章を授与したハルモニウム奏者や、改良楽器「サムワディニ」の考案者の事例から、奏法や楽器改良に尽力した、文化変容における「変革者」の存在を示した。

第2章「国産ハルモニウム製作にみる都市単位でのローカル化」では、コルカタ、ムンバイ、デリーの工房を事例として、各都市で進行する製品のローカル化を中心に検証した。各製品改良は鍵盤やリード盤に顕著に見られ、音量・音域・音質の改良や、部品の規格化や分業化という生産性での改良、安価資材によるコスト面での改良とその目的も多様化し、また生産体制も、職人氣質なコルカタの工房のように、専門の部品工房を含む分業体制と、デリーの工房のように全作業工程を同一工房で行う量産体制とでは、産業規模に格差が生まれていることが明らかとなった。流通・販売を直接手掛ける楽器工房にも経営能力が要求され、近年のメディア戦略による販路拡張や国外輸出の増加といった変化が、更に格差を助長させ、一部の楽器工房の存在を揺るがしている事実を指摘した。

第2部の第3章「インド国内における電子キーボードの需要拡大」では、1991年の経済自由化政策以

降、経済成長に伴う中間層の増加等が、若年層の習い事として電子キーボードの利用を拡大させ、それに伴う学習環境の多様化を多数の事例から明示した。

第4章「国内市場における電子キーボードの新展開とグローバル化のプロセス」では、インドの鍵盤楽器市場が現在、カシオ製品とヤマハ製品の二大競合時代に突入し、両社の本格的な市場参入が、流通の多層化、販売場所の拡大等の変化を引き起こしていることを明らかにした。また2007年に両社が発売した、インド市場向け電子キーボードには、インド・リズムやインド音色が標準装備され、ローカル側とメーカー側の双方向的な製品開発プロセスが、インドに楽器開発の新時代をもたらしたと指摘した。

第5章「ハルモニウムと電子キーボードの受容に関する比較考察」では、両楽器が広く受容される要素として、床面での胡座演奏、携帯性、伴奏楽器に必要な持続音、移調機能の付帯、複数の音楽様式への汎用性等を指摘した。

以上を総括すれば、インドの音楽文化における楽器に対するローカル規範とは、楽器という「モノ」に依存するのではなく、古典音楽から派生した理論や表現方法を忠実に表出するという、「音」に重点を置く思考であり、それが最優先される。それ故に、そうした「音」の具現化が可能であれば、鍵盤楽器でも電子楽器でも許容され、古典音楽における電子キーボード奏者の出現も、まさにそれが表面化した現象と言える。ハルモニウム奏者は過去の論点であった装飾技法を奏法改良によって克服したが、一方の電子キーボードにはピッチベンド機能が備わり、演奏にはそれが利用されるのである。こうした楽器に対するローカル規範と、ハルモニウムと電子キーボードに備わる「身体性」「携帯性」「利便性」「視覚性」「汎用性」という要素が合致したことが、インドに伝播した複数の鍵盤楽器の中でも、両楽器がインド古典音楽にまで採用され、現在も需要拡大する要因であると結論づけた。そして更には、楽器の多様性を容認する文化的寛容性こそが、時代を超えてインド固有のローカル規範を保護し、伝承し、保存することに繋がっていると指摘した。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、20世紀以降のインドに定着した二種類の鍵盤楽器、ハルモニウムと電子キーボードの受容過程を、現地調査の結果に基づいて考察し、それを「グローバル化」と「ローカル文化」の再編という観点から分析した論文である。

本論文は本論文全5章および序論、結論から構成され、さらに付録の映像資料(DVD)を伴う。第1章ではフランス製のハルモニウムが19世紀後半にインドにもたらされて以降、インド国内での論争を経て今日の定着に至る経緯を跡づけた。第2章では現在のインド国産ハルモニウムの製作を、各地の工房への取材により克明に記述し、地域ごとのローカル化が進行している実態を明らかにした。第3章では1990年代以降のインド国内における電子キーボードの爆発的な需要拡大とその経済的背景を述べ、古典音楽への電子キーボードの採用をローカル文化の変容の一例とした。第4章は日系メーカー二社によるインド市場への参入、すなわちインド都市部中間層をターゲットとした開発・販売・教習の戦略を関係者へのインタビュー等を通して明らかにした。第5章はハルモニウムと電子キーボード、そして部分的にインドに受容されたピアノを比較した結果として、前二者における利便性、汎用性等の性質を指摘し、インド音楽文化における「音」重視の思考に由来する文化的寛容性とその受容を支えていると結論づけた。

本研究は、強固な伝統重視の姿勢ゆえにこれまで論じられてこなかった、インド音楽文化における新しい楽器の受容プロセスと近年の変化に光をあてたオリジナリティの高い研究である。また、インド各地のハルモニウム工房、改良楽器の考案者たち、電子キーボードのメーカーなどに果敢かつ丹念に取材調査を行って多くの新情報、新事実を見いだしたことも特筆すべきことである。変化の激しい現象を綿密な取材によって記述し、付録の映像資料とともに生き生きと摘出したことは、執筆者の力量として評価に値する。

その反面、研究の理論的な枠組みとして設定された「グローバル化」と「ローカル文化」は、両者の関係がわかりにくく、また受容が柔軟かつ多様に展開する様態を説明しようとして準備された「文化的寛容性」「リゾーム的思考」等の語は、単なるキャッチフレーズ以上の正確な意味を持って用いられていない。流動的でホットな事象であるがゆえの理論化の困難を差し引いたとしても、本文中でヒンディー、ベンガル等の原語表記が原則を欠くこととあわせ、学術論文としての一層の厳密さが求められるところである。

しかし、楽器という「モノ」とそれをめぐる「行動」を通してインド音楽文化の美的な本質に迫ろうとする本研究のスタンスは、インド音楽における美意識の問題を考える上で、斬新かつ有効な態度であると考えられ、今後の議論の進展を導くものとなった。上記の評価とあわせ、本研究が博士論文にふさわしい学術的成果を挙げたと認められる所以である。よって合格とする。